

六十年の・夢叶う

青い志を立てたのは 今から六十年前の中
学二年の夏休み 十四歳の少年でした 演歌
全盛時代 怖いモノ知らずの少年の私は三つ
の演歌？の詞を K・レコードへ送りました
間もなく真っ赤に添削された詞が送られてき
ました 私の詞はその赤ペンの下で見えませ
ん それでも嬉しくて勿論舞い上がりました
作詞家の先生になろう 幼い夢は純情でした
が泥百姓の六人の弟妹の長としてそれは泡沫
よりも儚い所謂夢の夢です

明けて昭和二十九年 中学が終るとバイク
を作る工場へ就職 しかし一年半で会社は倒
産 十六歳の秋でした それからはあっちの
工場こっちの曰雇い 落着かない日々は過ぎ
て 悪の仲間へ引摺られ夜遊びも覚え それ
が青春でした そんなこんな毎日に正気
に戻り 夢を忘れていくことに気がつき 以
下同文の類から離れ 土木作業員の仕事で

真面目に働きました

四十五歳の早出勤の朝 まさかの事故が私に起きました 自転車に乗り損ねた私はコンクリートの側溝にはまり 身動きが出来ません 何で出られないんだろう 痛みも傷もないのにどうしたんだろうと . . . 気は確かなのに体が全く動かないんです 頸椎損傷 首から下の神経が駄目との医者の方診察 昨日の今日まで働いていた私の人生の終わりです そして三年五年と十年は引きこもり 世に出る勇氣はいつか冷めて もうどっちでもいいやと全く意気地を失くした人間 にと がある日私は自分という字に気づき はっとしました 自分という字は自らを分けると書きます そうか そうだったのか 働いていた自分と 動かない今の自分を分けて 生さればいいんだと 途端に動かない体が浮き上がり何だか身が軽くなりました 引きこもりしていた時間が勿体なく随分と損したか と が私なりに人間と云う生きる者が見えて

きたんです

とそんな時ある人を想い出し来て貰いました
た 彼もまた青い日の夢 歌手になる事 大
先生について四十年余りの日々一枚のレコ
ードも出して貰えぬ不運な人 運のない人で
した 古希を過ぎた私にはこの人に事情を話
したら何かの道があるやもと 祈る念いとは
まさにこの事です 私 業界に詳しい彼に全
てを 新え何とかならないかと頼みに頼みま
した 彼は私の歌を読み K・レコードのプ
ロデューサーに知り合いが居りますから 頃
合をみて見て載せましよう と 私の歌を五つ
程持ち帰りました それからの日々は気が気
ではありませんでした 待つこと一月あまり
プロデューサー曰く 素人にしては中の上と
の返事との事 K・レコードのプロデューサー
したる人の感覚に合い通じる私の歌 嬉しい
のみの一言です

私は彼にプロデューサーとの面会の下拵え
を是非にもと 私の歌が世に出る最後の干支

ンスです 今を逃したら私の一生は何だったのか 生きて 十年の七十四歳の挑戦です ここで嬉しがってる場合ではありません あの中学生の青い時代から六十年の年月 動かない躰になつてから三十年の毎日は一万頁でも三万頁でも書ききれない色々が 止まる事ない来し方に 一枚のレコードに命を賭した夢は 儚い泡沫で終るのか それとも現つとなり花として咲くのか まさに形振りかまわずの直訴でした

向一つ出来ない私は 全てが人頼りです 彼も私の執念にだいぶ参りましたと後日苦笑いしました 彼がプロデューサーとの仲人となり 私との面会意向を伝えて貰い プロデューサーは暫らく待つてくれとの返事 私はその返事に ヨシやったと合点し これから先の事の彼是も考え 一人悦に入り喜びに愉しみにズツポリとはまり まるで子供の様でした しかし二月と三月と何の電話も連絡もなく 何となく不安となり再度彼に催促しま

した 十二月も中旬となり 正月前はプロデ
ユーサーも一年を始末するのにも忙となり
正月明けにしましようと 彼からの電話が
っかりしましたがこっちは車椅子とベッドの
閑人 先様は現役のプロデューサー 騒いで
もどうこうする術はありません 年更もな
くはしゃいだ事を ただ啜うだけでした
年明けの十五日 二十日正月を過ぎても一
向に沙汰もなく 時も月日も無情なほど無情
です

そんな春が見え始めた頃 彼からの電話で
した プロデューサーが二時間くらいなら時
間がとれるとの事 勿論異議なしの即答です
私は考え勇気を出して付き添いのない一人の
上京を決めました 五十年ぶりの東京です
勿論何が何だかさっぱり解りません でも
馱員さんがソツのなり段取りで彼との待ち合
わせの池袋に無事に着きました 全く人々々
の東京です 彼の案内でK・レコードの本社
にと 私は六十年の夢のすべてを気取る事な

く一気にプロデューサーにしゃべりまくりま
した。曰く「ここで返事は答えは出ません。暫
らく時間を下さい。次の再会を約束してその
日は終わりました。私には何かが見えてきま
した。絶対にあの人はどうにかしてくれる
そんな予感がしたんです。六十年の夢が七十
四歳で叶う。こんな躰で夢の力でただ生きて
来た。細野壽一が、ボソノ壽一郎に、躰は勤
かぬが夢はキツと成る。自らの信念に間違
いはなかったと。

辛いといえは毎日のすべてが辛い事のみぞ
す。しかしその辛い事があつたから、夢とい
うモノのカで精一杯生きられた。先走るおも
いと懐に、それからまた二月三月と連絡を待
ちました。ただ待つ身はどこの人には歯痒
いものはありません。

彼からの電話。プロデューサーが会いた
いの事。ついに来たかと無論一人での上京で
す。歌い手のいい娘が見つかった。私はエツ
と話はそのまご掛つていたのかと。おしゃべ

りの私がまさに絶句状態に 返す言葉が見つかりません プロデューサーは 私の六十年の生き方に感心してそれなりの歌い手を捜していたんです 余々嬉しいかがりです

間もなく歌い手とプロデューサーがこの私の自宅に東京から来てくれたんです 歌い手の娘は 九州は宮崎市の 中々の可愛い娘でした

それからこの話は今までが嘘のように話が進み トントン拍子に吹き込みの日までが決まりました

夢は絶対に生きている限り捨てるべからず この一言です 私の夢は 六十年の歳月を経るついに現つたのです 今の今を思う時 人という者の一寸先は闇と云われ その人のもしやもまさかの坂は人には見えません 人という厄介者は 事の一つに一喜一憂する者 私の今は生きていく良かつたの毎日です

私の作品は 私から巣立ちもう私にはどうすることも出来ません 六十年の歳月に

ただ有難う 人事を尽くして天命を待つ
私のいまの偽ざる心境です

冬の風鈴 合掌です